

2018年度タイ & シンガポール研修旅行報告

先川 信一郎*

(受領日：2019年5月7日)

高知工科大学国際交流センター
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

* E-mail: sakikawa.shinichiro@kochi-tech.ac.jp

要約：グローバル化戦略の一つである2018年度のタイ・シンガポール研修が、2019年3月17日から26日までの日程で行われた。7年目となる今回の研修には、高知工科大学（KUT）の学部生20人（男子12人、女子8人=1年生15人、2年生4人、4年生1人）が参加。タイの泰日工業大学（TNI）、キングモンクット工科大学ラッカバン（KMITL）、シンガポールでは、シンガポール科学技術研究所（A*STAR）や南洋理工大学（NTU）、ベンチャー企業を訪問した。なかでもKMITLで取り組んだPBL（Project Based Learning=課題解決型学習）は、難易度がやや高かったものの、日本とタイの学生たちはチームでアイデアを出し合い、解決策を探り、英語でプレゼンテーションを行った。学生たちは、こうした経験を通じてコミュニケーション能力をさらに鍛え、「個」としての自信を深めたように思われる。

1. はじめに

海外研修の目的は、異文化への理解を深め、国際的な視野を広げることにある。それには、自分の考えを英語ではっきりと伝えるコミュニケーション能力が必要となる。今回は、海外が初めてという学生が大半だったため、準備には時間をかけ、事前研修を9回実施した。このうち2回は、Listening & Speakingの集中講義を受講。さらに、病気や事件、事故に対応する海外での危機管理について、全員が専門家による講習を受けた。

参加学生は、英語能力よりも、「やる気」を重視して選抜した。このため、KMITL（キングモンクット工科大学ラッカバン）で英語によるPBL（Project Based Learning=課題解決型学習）にスムーズに取り組めるか、多少の懸念があった。しかし、事前研修で練習を積み重ねたおかげで、現地では、すぐに各5人の8チームで課題について議論を深めることができた。また夜は、タイの学生たちが食事やマーケットを案内してくれ、お互いに打ち解けたようだ。

危機管理の側面からいえば、実はタイの政治情勢が気になっていた。プラユット首相の軍事政権が続くタイでは、3月24日に約8年ぶりに下院総選挙が

実施されることになっていた。研修は選挙期間中とあって、バンコクの幹線道路沿いには候補者の看板が並び、タイ貢献党や国民国家の力党、新未来党などの政治集会があちこちで開かれていた。そこで、学生たちにはバンコクの中心部や公園に近づかないように伝え、外務省の「たびレジ」から、国内情勢に注意を払うよう徹底した。

次に訪問した多民族国家のシンガポールは、タイとは雰囲気は全く違っていた。その国家戦略や科学技術力、教育レベルの高さに、学生たちは一様に驚いたようだ。若い世代によるベンチャー企業のスタートアップにしても、アイデアさえあれば、だれでも起業できる。そんなところに、魅力を感じていた。

以下は学生たちの報告・感想である。

(学年・所属は研修実施時)

【研修参加者】

野田正太郎 情報学群4年

三輪田廉 システム工学群2年

井上智賀 経済・マネジメント学群2年

上田侑佑香 経済・マネジメント学群2年

武田向日葵 経済・マネジメント学群2年

菊谷尚暉 システム工学群1年
 須佐美大夢 システム工学群1年
 曾我部蓮太 システム工学群1年
 中島天星 システム工学群1年
 沼野翔泰 システム工学群1年
 稲田葵大 環境理工学群1年
 山本航太郎 環境理工学群1年
 赤嶺駿 情報学群1年
 塩谷祐佳 情報学群1年
 中谷亮太 情報学群1年
 森田大智 情報学群1年
 北島朱音 経済・マネジメント学群1年
 小山和佳奈 経済・マネジメント学群1年
 濱田光 経済・マネジメント学群1年
 三浦紀乃 経済・マネジメント学群1年

2. 笑顔の出迎え

◇ 経済・マネジメント学群2年 小山 和佳奈

研修1日目は、早朝に高知龍馬空港を出発し、羽田空港を経由して夕方にバンコクのスワンナプーム国際空港に到着した。昼食は、機内食で済ませた。空港へ到着後、バスで約1時間半の場所にあるホテルへ移動した。ホテルの部屋は2人部屋で、とても快適だった。

ホテルにチェックインした後は自由時間だった。KUT学生全員で夕食を食べに出かけた。ホテルの近くのタイ料理レストランに入り、パッタイやガパオライスなどを食べた。タイ料理は日本人には辛すぎると聞いていたが、初めて味わう現地の料理は口に合った。私たちは、注文した料理を交換し合い、さまざまな料理を味わった。

この後、お土産を買うためにナイトマーケットやショッピングセンターに向かった。独特の香辛料の香りと生暖かい空気。タイに来たことを実感しながら日用雑貨の買い物をした。会話は英語で伝わったが、店に入ったり商品をもったりする際に、タイ語で「ありがとう」や「こんにちは」などの挨拶をして、店員との会話を楽しんだ。歩道に並んだ屋台は活気があり、眺めるだけわくわくした。こうして研修初日は、タイ独特の喧噪と雰囲気になれることができた。

【感想】私が最も印象に残ったのは、PBLでタイの学生たちと交流したことである。私たちのグループは、KUT学生3人とKMITL学生2人



図1. 研修初日のTNIで学生たちは緊張気味

の5人構成だった。意見を出し合ってテーマを決めるところからプレゼンテーションを作り上げるまで、プロジェクト全体を通して気付いた2つのことを述べたいと思う。

1つ目は、テーマを決める際に互いの国の事情について話し合いをしていた時のことだ。日本人学生とタイ人学生には、明らかな違いがあった。KUT学生の意見がうまくまとまらず、発言が曖昧だったのに対し、KMITL学生は、ひとつひとつの発言が論理的で筋が通っていた。日本人学生には、自分の意見を相手に伝えるための文章に瞬時に変換する能力が欠如しているように思えた。日本人学生は普段から学校などで発言する機会が少なく、機会があったとしても自分から積極的に話そうとしていないからだろう。

自分の意見に自信がないから、というのもあるが、意見を述べる訓練が足りていない、というのが一番の原因だ。私は近い将来、海外留学を考えているので、外国の学生に引けを取らないくらい論理的な発言ができるよう練習しようと思った。もちろん、この発言力の違いは、英語力の違いにも結びついている。コミュニケーションはすべて英語で取っていたが、タイ人学生は、母国語でない英語で自分の意見を自由に述べていた。この点も日本人学生が見習わなければいけない点だろう。

2つ目は、パワーポイントの質の高さと、初めて取り組むプロジェクトに対する考え方である。KMITLの学生が、パワーポイントを作り上げる早さには圧倒された。「どうやってこのスキルを身に付けたの?」と聞くと「今回は初めてだ」という返事だった。これにはショックを受けた。日本人学生は、初めて取り組むこ

とに自信が持てない傾向があるが、タイ人学生は、そうではなかった。

タイ人学生が、初めてのパワーポイントの作成にもかかわらず、何度か経験のある日本人学生が作るものより質のいいものを作れたのは、自分に自信を持ち、常に前向きに物事をとらえる習慣があるからではないだろうか。日本人学生は、新しいことに挑戦する時、「やったことがないからできない」とマイナスに考えがちだが、タイ人学生は「できるかもしれないからやってみよう」とポジティブに考えるようだ。

この2つの点において、私はタイ人学生を学習したい。これからは、積極的に人前で話をするをいとわず、直面する物事をポジティブに考え、さまざまなことにチャレンジしていきたいと思う。

【タイ・シンガポール海外研修日程】

- 3月17日(日) 午前：高知発、羽田経由バンコクへ
- 3月18日(月) 終日：泰日工業大学(TNI)訪問(講演、研究室見学、学生交流)
- 3月19日(火) 午前：キング・モンクット工科大学ラッカバン(KMITL)へ移動
午後：学生交流、アイスブレーキング、PBLグループ分け
- 3月20日(水) KMITL 訪問(Project Based Learning)
- 3月21日(木) KMITL 訪問(Project Based Learning)
- 3月22日(金) KMITL 訪問(Project Based Learning 発表)
- 3月23日(土) シンガポールへ移動
- 3月24日(日) 南洋理工大学訪問、学生交流
- 3月25日(月) 午前：シンガポール科学技術研究庁(A*STAR)見学、講義
午後：ビジネスインキュベーターを見学、夜羽田空港へ
- 3月26日(火) 朝、羽田空港から空路高知空港着

◇ 情報学群1年中谷 亮太

研修2日目は泰日工業大学(TNI)を訪問した。初めての海外の学生との交流であったため、みな期待と不安が混じった顔をしていた。当初の予定では、午前8時20分にホテルを出発する予定だったが、バスの到着が遅れ、9時30分

にホテルを出て、10時10分ごろにTNIに到着した。

TNIでは、先生方と学生たちが温かく迎えてくれた。TNIの学生は日本語で挨拶をし、私たちを教室まで案内してくれた。昨年この研修に参加した先輩から「TNIには日本語を話せる学生がたくさんいる」ということは聞いていたが、中には日本人が話していると思うほど流暢な日本語を話す学生がいて驚いた。

次に、TNI事務局の見崎大介さんによるオリエンテーションがあった。ビデオによるTNIの紹介の前に、見崎さんが「最後に質問をしますからしっかり見てください」と言ったので、集中して動画を見た。これによってTNIが2007年8月2日に開学したこと、TNIには3つの学部があること、就職率が開学から100%であるなど、様々な情報を知ることができた。見終わった後、見崎さんから3つの学部の名前、学生数、TNIは現在何周年か、TNIを省略せずに英語で言うとなんというかーといった質問があったが、私たちは、そのすべてに即答できた。

続いては、TNIの池田隆先生によるタイの文化の講義だった。そこでは、タイの歴史や仏教、タイのお土産品などについて詳しく学んだ。タイ料理の名前は、いくつかの単語をつなげ合わせているということも知った。例えば、トムヤンクンは、「トムヤン」が辛いスープ、「クン」がエビという意味で、合わせて辛いエビのスープということになる。単語を知っていれば、料理がわかるところに面白みを感じた。

お昼頃にバディの発表があった。お互いに英語で自己紹介をした後、一緒にランチを食べた。ランチはバイキング形式でどの料理も美味しく、大学生活や専門科目など、リラックスして話をすることができた。

【感想】

私が学生との交流で印象に残っているのは、KUTとTNIの学生全員でよさこいを踊ったことである。本来は、私たちだけでよさこいを披露する予定だったが、踊っている最中に、音楽が止まるというハプニングがあった。踊りを初めからやり直そうとしたが、せっかくなのでTNIの学生も参加して、全員で踊ることになった。私は、パフォーマンス担当だったが、結果的に全員で踊れたことは、とてもよい思い出になった。



図2. ランチでは英語による会話が弾んだ

一方、今回の研修で、後悔したことが二つある。一つは、相手の国について事前調査しておくべきだったということだ。例えば、タイ人の学生に何を食べてみたいかと聞かれたことがある。しかし、私はタイの料理についてあまり知識がなかったため、「お薦めは何?」といった漠然とした受け答えしかできなかった。せっかくタイの学生が美味しい現地の料理を紹介しようとしてくれているのに、もったいないことをしたと思っている。

もう一つは、英語での会話の続け方である。つまり、キャッチボールだ。あらかじめタイ人学生と話せるよう質問を考え、質問された時の返答を準備はしていた。しかし、実際に会話すると、話のつなげ方が分からず、会話が止まってしまうことがあった。また、相手の英語が聞き取れない時は、黙ってしまった。そこで、自分の英語力はまだまだだと痛感した。

研修を通じ、異国の文化や食事、日本人との価値観の違いなどを知ることができた。食事では、どうしても口に合わないものもあった。その一つは、KMITLの食事の時に出てきた甘い黄色いお茶である。他の日本人学生も口に合わない人が多かったようだ。タイの学生に、このお茶は口には合わない、と伝えると、美味しいのになぜ?という顔をされた。

英語レベルに関しては、私はTOEICの勉強だけでなく、サマースクールや海外研修に参加するなど、ある程度の努力はしてきたと思っていたし、周囲からもそう思われていた。しかし、今回の研修で出会ったタイの学生たちは、自分よりもずっと努力している人たちばかりで、PBLでチームを引っ張ってくれたのは、タイの学生であった。

日本の学生は、大学に入るまでは努力するが、大学に入ると努力しなくなる、という話を聞いたことがある。私は、自分自身はそんなことはないかと自負していたが、思い返せばもっと努力できたはずだ、と感じるところはある。今回の研修でタイ人学生に刺激を受け、自分はいっと努力しなければならないことを思い知った。

◇ 経済マネジメント学群3年生 上田 侑佑香

研修2日目の午後は、TNIの学生とともにランチを食べた。メニューは、マッサマンカレー、豆腐スープ、パンチジュースなどであった。日本料理より辛いものが多く、日本とタイの食文化の違いを感じた。KUTとTNIの学生とがそれぞれバディを組んで一緒に食べ、英語で会話しながら打ち解けることができた。

この時、英語がうまく伝わらなくても、ジェスチャーや顔の表情でコミュニケーションがとれることを実感した。TNIの学生の中には、日本語が話せる人が何人かいて、日本語が外国に親しまれているということを知った。

ウェルカムランチの後、3つのグループに分かれ、大学内の研究室を見学した。TNIは、ものづくりに特化した教育を行っていた。工学部の研究室では、電磁気の動的研究や、回路のデザインについて説明を受けた。その後、KUTで博士号を取得したTNIのウィンモル教授から、教育システムと学習テクニックについての講義を受けた。日本とタイの違いや、明白な知識と暗黙の知識の違い、データ分析など、私たちの専門分野にも有益な内容だった。

タイ文化体験では、ダンス・楽器・キックボクシングの3グループで、TNIの学生と交流した。ショータイムでは、TNIの学生に教わったことを発表し、みんなでタイの文化を楽しむことができた。

最後に私たちも日本、高知、KUT、よさこいについて発表した。それぞれのチームが今までの事前研修での成果を披露した。よさこいのパフォーマンスは、途中で曲が止まるというハプニングがあったが、みなで一緒に踊りを楽しむことができた。

【感想】

タイの学生との交流では、最初は英語がうまく伝わるか不安だった。だが、TNIの学生とバディを組み、その子が日本語を少し話せたので、



図3. TNI では車両の研究も盛んだ



図4. ウィンモル先生の熱血講義に感動

すぐに仲良くなることができた。緊張と不安がほぐれると、私たちは大学の話だけでなく、アルバイトや家族のことなど、何気ない会話をして楽しんだ。

放課後の自由行動では、バスに乗って、夕食を食べにでかけた。私は辛いものが苦手で、どちらかというと、タイ料理は口に合わなかった。初めての海外だったが、日本から離れるだけで、こんなにも食文化が違うということを実感した。

KMITL では、タイ人2人・日本人3人のグループでPBLを行ったが、TNIのバディとは違い、日本語が通じなかったので、英語でのコミュニケーション能力が試された。始めは、相手の言っていることは理解できても、自分の伝えたいことが英語で伝えられず苦戦したが、日本人3人で協力し合い、徐々にコミュニケーションを取れるようになった。やがてタイの学生と英語で話すことをとても楽しく感じはじめ、自然とお互いに笑顔が増えた。今まで日本で学習してきた英語で、世界の人と繋がれることの嬉しさを体感した。

私は、英語で話すことが得意ではないが、研修を通して、とりあえずチャレンジして話してみることの大切さを学んだ。タイの学生は、みな心優しい人たちだった。一緒にバスに乗ったり、仏教寺院を見に行ったり、PBLに取り組んで楽しむことができた。どれもが私にとっては貴重な経験であり、タイの文化に触れることで、日本の文化の良さにも気付くことができた。

◇ 経済・マネジメント学群1年 北島 朱音

3月18日の午後は、バディとの昼食から始まった。昼食中はTNIの学生がお薦めの観光地を紹

介してくれたり、タイの食べ物について教えてくれたりした。TNIの学生は日本語を理解できる学生が多く、日本文化にとっても興味を示していた。

研究室見学では、先端電磁気学、ものづくりの研究室を見学した。その場にいた小さな子供が、ベルトコンベアなどの装置を使って遊んでおり、学生たちは、楽しみながら学んでいるようだった。特別講義では『学生主体の授業』を体現するかのような講義を受けた。TNIのウィンモル先生は、学生と双方向のコミュニケーションを取りながら、英語で講義を行った。講義はクイズに答えると賞品がもらえるなど笑いが絶えず、KUTの学生も活き活きとした表情で講義を受けていた。

タイ文化体験では、ムエタイ、音楽、ダンスの3つから1つ選択して全員の前で練習成果を披露した。ムエタイは想像以上に体力を使うため、KUTの女子学生はへとへとになった。音楽は、木琴のようなラナートや、金属製の打楽器コンウォンヤイなどの伝統楽器を使い、習ったばかりの曲を演奏した。

タイダンスは日本の盆踊りに似て、同じ動作を繰り返す動きだった。文化体験が終わった後、TNIの学生が、模範的な生演奏と伝統の舞踊を披露してくれた。軽やかな音楽と、指先の動きが巧みな踊りは優雅で、芸術的だった。よさこい鳴子踊りでは、途中、音楽が止まったりしたものの、全員で踊りを楽しみ、一気に仲良くなることができた。

【感想】

研修を通して、人の優しさに触れ、様々な学びを得ることが出来た。とりわけ、PBLと企業



図5. タイの伝統楽器の演奏に挑戦

見学は、私にとって、思い出深いものとなった。PBLは、英語でコミュニケーションをとらねばならず不安が大きかったが、いざ始めてみると、想像していた以上に意見交換をすることが出来た。タイの学生たちは、一生懸命私たちの言いたいことを理解しようとしてくれた。その姿勢に励まされ、恐れることなくコミュニケーションをとることが出来たように思う。

また、PBLを通し都市部への若者の集中や学生が受け身である授業制度など、タイが抱える社会や教育問題が日本と共通している点など、ネットだけでは得られない情報を身に着けることが出来た。こういった社会問題を、もっと深く英語で議論できるようになりたいと感じた。

企業見学では、高知県の製品が海外へ浸透していること、高知と世界を繋げている人たちがいることがわかった。将来の仕事について考える機会が増えた私にとって、世界の企業を体験できたことは、とても大きな刺激となった。

このほかにも、成長を感じるものがたくさんあった。とくに、タイとシンガポールの学生の学問に対する熱意が、自分を奮い立たせてくれたことは間違いない。彼らが私たちにしてくれたように、私たちも海外からの留学生に、もっともっと親切にしたいと思った。

◇ 経済・マネジメント学群1年 武田 向日葵

3月18日午後、当初は緊張していたが、バディとの会話に少しずつ慣れると、相手のことが徐々に理解できるようになった。TNIの学生は、日本語の簡単な会話が出来たため、日本語で積極的に話しかけてくれた。また、KUT学生も僅かではあるが、バディに教えて貰った簡単なタイ語で話した。互いを思い合い行動する



図6. 汗だくになったキックボクシング

ことは、良いコミュニケーションをとるために必要なことなのだとわかった。日常的な英語が上手く使えないこともあったが、手振り身振りで伝えることができた。言葉以上に相手の考えを察することや、頑張って伝えたいという気持ちが大切なのだと感じた。

研修後、TNI学生がバンコク市内を案内してくれた。街には、豪華な装飾を施した仏教寺院や活気に満ちた人々の暮らしがあつた。私たちにとって、タイの街並みは非日常の風景であり、なにもかもが新鮮だった。

TNIの学生はとても親切で、食べたいものや買いたいものを伝えると、すぐに案内してくれた。食べ物や名所旧跡でも丁寧に説明してくれた。これは、とても貴重な時間だった。私たちが難しい質問をしても、わかるまで調べて一生懸命に気遣ってくれた。

TNIの学生との交流は1日のみではあつたが、良い友人になった。彼らから、タイを知ってもらいたい、楽しんでもらいたい、という熱意を感じた。おかげで充実した時間を過ごし、感謝の気持ちでいっぱいだ。

【感想】

今回の研修で、私は英語力を磨く大切さを痛感した。研修までの目標は、「英語に対する苦手意識を克服し、自ら積極的にコミュニケーションをとる」ということだった。この目標に対し、必要なのは英語の力だけではない、ということにも気付いた。英語を学ぶのはもちろんだが、積極的にコミュニケーションをとる点では、ある程度目標を達成できたと感じている。英語がさらに話せるようになれば、それは私自身にとって大きな強みになるだろう。英語に対し

ての自分の考えは、大きく変化していった。

研修は、新たな知識や見識を得ることができ、良い経験になった。これは、今後の私の学生生活にとって大きな糧になるだろう。このような素晴らしい機会を与えてくださった本学や両親、充実した時間を共有した仲間や先生方に心から感謝したい。

◇ システム工学群1年 菊谷 尚暉

研修3日目の午前、首都バンコクから空港近くのラッカバンへ移動し、KMITLを訪問した。朝、私たちは、約1時間かけて、ラッカバンのホテルへと向かったバスで移動中、車内でガイドさんから観光地ワット・ポーやワット・プラケオ、トムヤムクンなどのタイ料理、タイの渋滞は、世界一であるという話を聞いた。

その理由は、車の数が急増しても、道路整備やインフラが追い付かないことにあるようだ。それ以外にも、タイのお坊さんの食事は、午前中に2回のみであることや、女性に触れられると、今まで積んだ徳がリセットされてしまうという話、また、兵役についても知ることができた。

KMITLでは、両校の学生の挨拶の後、ウェルカムランチがあった。食事はビュッフェ形式で、KMITLの学生が、タイ米やグリーンカレーについて説明してくれた。すると、いつの間にかみな笑顔になっていた。笑いは世界共通なのだ実感した。食事後、私たちは、仲の良くなったKMITLの学生と、学食で冷たい飲み物や、お菓子を買った。初日からうまく交流ができたことで、翌日のPBLへの不安が少し減ったように感じた。

【感想】

私がこの研修でわかったことは、初対面の人と仲良くなるには、エネルギーを要するということだ。人と人とは、言語を介さずとも交流することは可能であるが、初対面の人と仲を深めるためには、会話が必要だ。その会話も何を話すか、考える必要がある。

ともあれ、多少不十分でも、伝えようとする気持ちがあれば、なんとか相手に伝わるのではないだろうか。さらに、この研修で気付いたのは、自分のこと、日本のことをもっと深く知って、相手に伝えなければならない、ということである。自分の考えを明確に述べるこそ、



図7. 収穫を祝う優雅なタイダンスを堪能

コミュニケーションの基本であるからだ。

3. なせばなる

◇ システム工学群1年 須佐美 大夢

研修3日目、私たちはKMITLを訪れた。一緒に昼食を食べ、交流を楽しんだ後、KMITLの学生の司会で、オープニングセレモニーが始まった。初めに先川先生がスピーチをした。KMITLやタイを訪れた回数、KUTとKMITL間の交換留学について話し、両大学の絆の強さを確認した。私たちは、このチャンスを生かしてお互いを知ろうと思った。次にKMITLを代表し、チャイアン先生が挨拶をした。私たちの来訪を歓迎し、3日間のPBLを通して最大限学ぶよう激励した。

この後、両大学の先生たちがプレゼントを交換した。全員で記念写真を撮り、私たちは準備してきた日本文化のプレゼンテーションを行った。途中、タイ人学生は、コマ、けん玉、おはじき、折り紙を体験した。特にけん玉は人気があり、多くの学生が面白がっていた。日本人学生がけん玉の技を成功させると、拍手が巻き起こった。次いで、よさこい踊りを披露すると、タイ人学生は携帯で動画を撮るなど、高知の伝統的な踊りに興味を示していた。踊り終わると大きな拍手があり、教室は和やかな雰囲気となった。これは翌日のPBLに備えた貴重な時間となった。

【感想】

私にとって印象的なことは2つある。1つ目は、PBLをする際の意思疎通の難しさである。テーマを決定した後、どのようなプレゼンの構成にするのか、どのように調査を勧めていくの



図8. 高知のよさこい踊りにみな大喜び

か、などを話し合った。私達のグループリーダーはタイの学生で、彼のやり方でプレゼンを準備していた。そのやり方は、明らかに日本の学生とは異なっていた。私ともう1人の日本人学生は、それが理解できず、準備が手詰まりの状況になっていた。その際、英語で意思疎通することが難しく、結局は私たちが譲り、タイの学生のやり方で準備を進めていった。

こうして出来上がったプレゼンを見ると、非常に分かりやすく、完成度の高いものであった。実際、私たちのプレゼンは、8チームの中で最優秀賞を受賞した。後から思い返すと、文化が異なれば、そのやり方（今回であればプレゼンの構成、調査方法）も異なるという意識が希薄だったことに気付いた。

私は、自分のやり方が正しいと考えていたため、うまく話し合いを進められなかったわけだが、異なる考え方に対して自分の意見を貫き通すのではなく、考えの違いを理解し合った上で話し合いをすることが、異文化の人との共同作業で大切なことだと分かった。将来、海外で働きたいと考えている私にとって、この経験は非常に価値があった。

2つ目は、リーダーとして研修を有意義なものにする方法である。私は研修中、日本人の友人と行動をともにすることが多かった。そこで、その学生が質問はできても、返事が聞き取れないせいで会話が弾まない、という悩みを抱えていることを知った。

日本に戻り、事後研修で研修中に感じたこと、成長したことなどを話し合った。私は友人に、研修中悩んでいたことは解決したのかと尋ねた。すると友人は「そういえば、その時より返事を聞き取れるようになった」と明るく答えた。

私は研修中にその悩みを聞いていたため、彼に成長を気付かせることができた。これは、研修を実り多いものにするため、非常に効果的な方法であると考えられる。私は、これから様々な研修のリーダーを務める者にこの方法を伝えていこうと思う。

◇ システム工学群1年 曾我部 蓮太

研修4日目は、KMITLでPBLを行った。ホテルを朝9時に出発し、KMITLまで20分かけて移動した。その日はまず、各チームのテーマ決めから始まった。そもそもPBLは「課題解決型学習」と呼ばれ、知識の暗記のような受動的な学習ではなく、自ら問題を発見し、解決する能力を養うことを目的としている。このようにPBLは自分自身で問題や課題を発見する必要がある。そこで、日本やタイの課題をKMITLの学生と共にいくつか挙げていった。私のチームは、日本の高齢化社会、自殺者の増加、過疎化、都市への人口集中などを列挙した。

タイの課題としては、交通渋滞、教育問題、公共交通機関のインフラ整備などが思い浮かんだ。世界的な課題については、地球温暖化、所得の格差、ゴミ問題などであった。どのチームも積極的に話し合っていた。

印象的だったのは、テーマ決めて進行役をしていたのは、ほぼタイ人の学生だったことだ。それは、KUTの学生のほとんどがこのような英語での討論に慣れていなかったせいもあるが、タイ人の積極性、行動力にはとても驚かされた。

テーマが決まったチームは、情報収集に移った。情報の集め方は様々で、インターネットを使うチームや、図書館で本を調べるチーム、街中や、校内の学生にインタビューするチームなどがあった。この日は主に情報収集に時間を費やした。夕食をともにしながらも話を続けた。

研修5日目は、前日に集めた情報を元に発表の準備に取り掛かった。この日はどのチームも教室内で作業をした。KMITLの学生は、ほとんどがパソコンを持っており、実に手際よくパワーポイントや発表原稿を作成していた。普段から頻繁にパソコンを使用しているのだろうと感心した。午後は、各チームが、KUTのPaul先生からプレゼン内容のチェックを受け、指摘された部分を修正したりした。その後は繰り返し発表の練習をし、最終日の本番に備えた。



図9. PBL では連日、真剣な議論が続いた

【感想】

私は以前にタイを訪れたことがあった。その時は旅行目的だったので、お寺やタイ南部のリゾート地を回った。その後、本学主催のタイ・シンガポール研修があることを知り、今度はより深い文化に触れようと思った。もちろん、英語で積極的にコミュニケーションをとることも目標だった。

TNIでは、最初はなかなか話せずにいた。相手から話しかけられる分には受け答え出来るのだが、いざ自分から話しかけるとなると、緊張感からか、うまくコミュニケーションが取れなかった。しかし、周りを見ると、みな楽しそうに会話をしていた。自分も頑張ろうと思い、話しかけてみた。すると、精一杯伝えようとしたら相手に伝わった。このときの喜びは、今まで味わったことのない感覚だった。

次に訪れたKMITLでは、PBLや夜の自由行動を通し、大勢のタイの学生とコミュニケーションを取る機会があった。今までは、相手に伝わるかどうか不安で話そうとしなかったが、いざ話してみるとちゃんと通じるし、ある程度は聞き取ることができた。この経験から、じっとしているより、どんどん話しかけたほうが自分の成長に繋がることを実感した。会話についての不安がなくなるにつれ、研修がどんどん楽しくなっていた。もっと英語を勉強し、スムーズに会話出来るようになりたいと思った。

シンガポールでは、企業見学を通じ、海外で働くということが具体的にイメージできた。さらに海外に興味がわいてきた。研修のおかげで、確実に自分の意識や行動が変わったと思う。この経験をもとに、英語学習や様々な学生活動に取り組んでいきたい。

◇ システム工学群1年中島 天星

3月20日は、KMITLの学生とKUTの学生で合同チームを作り、PBLを開始した。私たちは、日本やタイが抱える問題について話し合った。日本やタイの独自の社会問題や、共通する課題など、思い思いにアイデアを出し合った。こうして課題が決まると、メンバーの役割分担を決め、解決方法について議論した。

その後、パソコンを使って課題に関連したデータなどを集めてみた。そこでも様々な問題点が見つかったため、どのように解決するか、チーム内で検討した。さらに私たちは、KMITLの学生たちにインタビューを試みた。日本では、学生にインタビューした経験がなかったので、新鮮だった。インタビューは動画に撮り、プレゼンテーションの中で使うことにした。このほか、夜は大学周辺で有名なステーキ屋に行った。タイのステーキは約200円と安く、とてもおいしかった。

翌21日も、PBLに取り組んだ。前日に行ったインタビューの編集や、パワーポイントの作成を続けた。インタビューの編集は初めてだったので、タイの学生に任せた。彼らの動画編集技術は予想以上にレベルが高く、驚きだった。チームによっては、寸劇や効果音を使うプレゼンの方法を考えていた。私たちは、インタビューで集めたデータをグラフにし、問題をどのように解決していけばよいかを考えた。

タイと日本人学生とのグループワークはすべて英語だった。タイの人の英語を聞き取るのは難しく感じたが、なんとか協力してパワーポイントを仕上げることができた。

夜は、KMITLで開催されていたJapan Festivalに行った。そこでは、タイの学生が米津のLemonを歌っており、日本語の歌はきれいな発音だった。日本の福笑いや輪投げなどの屋台もあり、みんなで楽しむことができた。挑戦した輪投げでは、20円相当でクッションをもらった。日本文化は世界でも人気があり、私たちは祭りを存分に楽しむことができた。

【感想】

研修で印象深かったのは、南洋理工大学(NTU)との交流だった。NTUの学生と話した時、彼らの英語の素晴らしさに驚いた。「日本愛好会」のメンバーということもあり、私たちがわかるように、ゆっくりと話してくれた。

中には日本語を6年間勉強しているという学生もいて、刺激になった。さすがアジアでトップの大学だけあって、学生の意識の高さに感心した。将来は、日本で働きたいという学生や、世界で活躍できる人材になりたいという学生もいた。日本人と比べると、シンガポールの学生は、自分の生き方のスタイルをきちんと持っていると感じた。

もう1つ気付いたことは、PBLでのタイ人と日本人のプレゼンの違いである。タイの学生は、プレゼンのデータを集めるためにインタビューをし、それを動画で撮影していた。さらに、寸劇や効果音にこだわりがあった。また、質疑応答でも、タイの学生は積極的に発表していた。これに対し、日本人学生は自らの意見を発表する人がやや少なく、タイ人の積極性を見習う必要があると感じた。

夜は、タイの学生の案内で、観光地へ行った。ナイトマーケットでは、鞆やタイパンツを買った。タイの学生に商品の値切り方を教えてもらい、思い切ってタイ語で値切り交渉をした。こうしてタイ語がうまく伝わった時は、嬉しかった。また、タイの学生にタイ語で語り掛けると、とても喜んでくれた。

このほか、私たちは様々なタイ料理を楽しんだ。トムヤムクンやパッタイは、辛かったが、予想よりおいしかった。辛い料理が好きな人にとっては、タイ料理は最高だろう。

今回の研修で初めて海外に行き、タイやシンガポールの人たちと話し、異文化や生活に触れた。これまで日本人は優しいと思い込んでいたが、タイやシンガポールの人たちのほうが、ずっと優しいと感じたのは、私だけではないだろう。

◇ 環境理工学群1年 稲田 葵大

研修6日目は、PBLの発表会だった。KMITLに到着すると、いつも通りコーヒーやココアが用意されていた。それらを飲んで目を覚まし、発表に臨む人もいた。

予定より少し遅れて発表会が始まった。各チームのプレゼンは、3日間で仕上げたとは思えないほどクオリティが高く、ユニークな内容ばかりだった。発表のやり方も、授業形式や自分たちで演じたりして工夫していた。パワーポイントにインタビューやイメージ動画を入れているチームもいた。発表終了後、先生方の講評



図 10. 自信につながった英語のプレゼン

があり、表彰式が行われた。1位は「タイのヘルメット未着用問題について」、2位は「うつ病問題とそのサポート」、3位は「観光地のごみ問題について」だった。学生たちにはそれぞれメダルが授与された。どの顔も嬉しさや達成感でいっぱいだった。学生たちの発想力と努力が凝縮された素晴らしいプレゼンだった。

この後、全員で最後の昼食を食べた。ここで強烈だったのは、豚の血を固めた食べ物だ。プルプルした食感で弾力があった。食後はみんなで記念写真を撮り、お土産を交換した。

自由行動で、私たちはタイ人学生の案内でワット・ポーや王宮、中華街を訪れた。観光名所への入場は、タイの学生と一緒にだと無料だった。私たちは、歩き疲れるまで、残る時間を楽しんだ。

【感想】

研修では、シンガポールの多国籍文化が興味深かった。公共機関や観光地では、中華系と思われる人が多かったが、マレー系やインド系の人たちもいた。私が驚いたのは、アラブ・ストリートやリトル・インディアを訪れたときのことである。電車を降りた瞬間から、周りを歩いている人の額にはビンディーやティラカがついており、頭にターバンを巻いている人がいた。通りに出るとインド系の人たちばかりで、香辛料の匂いがした。ごみ箱周辺は、ちらかり、そこはまるでインドだった。

ちなみに夕食はチャパティとカレーを食べた。店では、アップビートの音楽が流れていた。インドを五感で感じる事ができた私は、文化の違いを、こんな小さな国の中で感じる事ができることが意外だった。

もう1つ驚いたのは、タイの学生の勤勉さであった。PBLの最中、前日の夜に何時間寝たか聞いてみると、「3時間」ということだった。自由行動で私たちを遅い時間まで案内してくれたのに、タイ人学生は、それから帰宅してパワーポイントを作ったりしていたのだ。その次の日も日中は疲れた様子も見せずに作業に取り組み、終わるとまた案内してくれた。どこからそんなモチベーションがわいてくるのか不思議だった。これは、私たちも見習わなければならない点だと思った。

研修では、想像以上の経験をすることができた。この刺激が、私の英語学習のモチベーションを上げることに影響したのは間違いない。研修をきっかけに英語力の向上、さらに人生の質を向上させていきたいと思った。

◇ システム工学群2年 沼野 翔泰

研修6日目、KMITLの学生とKUTの学生が、PBLの発表を行った。朝9時半頃から発表が行われ、全8つのチームが「地震発生時の津波対策」、「退屈なクラスを楽しくする方法」、「観光地でのゴミ問題」など、日本やタイだけでなく、世界に視点をおいたテーマを取り上げていた。

発表の仕方もそれぞれで、ロールプレイングをしてわかりやすく解説したチームや、インタビュー動画を編集して流したチームもいた。中でも「バイクのノーヘルメット」問題を取り上げたチームは、ノーヘルメットで事故に遭ったらどうなるのかというショッキングな映像を流した。これはインパクトがあった。発表後は、内容に関する質問をする学生が多かった。

全チームの発表後、閉会式と表彰式が行われた。まず今回のPBLに関してPaul先生、KMITLの先生方から講評があり、学生全員に記念品が贈られた。さらに上位3チームの表彰が行われ、最優秀チームには、記念のメダルとトロフィーが贈られた。その後は記念撮影をしたり、昼食を食べたりしながらPBLを振り返った。

午後からは、ボートに乗って水上観光をした。ワット・ポーを見学に行くグループもあれば、タイ名物の青空マーケットに行っておショッピングを楽しむグループもいた。ホテルに戻ると、みんなで記念写真を撮り、別れを惜しんだ。

【感想】

今回の研修では、日本語とは違う言語でコ

ミュニケーションを取ることの難しさと、楽しさを再認識することができた。タイは公用語がタイ語であり、学生が話す英語にはタイ訛りがあった。シンガポールの公用語は英語だが、「シングリッシュ」とよばれるほど訛りが強かった。

このため、聞き取りに苦労したが、その分、理解できた時は嬉しかった。ただ、私たちが理解しやすいようにゆっくりと話してくれた時は、少し申し訳ない気持ちになった。このほか、TNIやKMITLの学生が、日本語を熱心に学んでいることには驚いた。

私たち日本の学生は、英語はネイティブではないし、英語を使わなくてもよい社会に住んでいる。そのせいか英語の勉強から逃げている人が多いように感じる。だが、海外の学生にとっては、英語がネイティブでなくても話せるのが当たり前、という考え方がある。これは、日本の学生も見習うべきだと感じた。

タイもシンガポールも道を歩くだけで、その国の特色が手に取るようにわかった。シンガポールは、道行く人々が多様で、多民族国家であることを実感した。タイでは、大学に行ける裕福な人もいれば、路上で生活する貧しい人もいた。日本では味わうことのできない湿潤な空気や異国の雰囲気を感じることができ、海外に行くことは、多くの発見があると、あらためて感じた。

現地の学生との交流も貴重な時間だった。タイで仲良くなった学生の1人が6月からKUTに留学するので、とても楽しみだ。今後は、KUTランチアワーなどに積極的に参加して、留学生との交流を深めていきたいと考えている。

◇ 環境理工学群1年 山本 航太郎

3日目、PBLのグループ分け終了後、まず、学内の図書館に案内された。KUTと同じように学生は24時間利用できる。しかし、入館するときには必ず学生証が必要で、学外の人が入館する際には、ゲスト用の入館証を携帯する必要があるという点で、KUTと異なっていた。

また、館内にカラオケルームやコーヒーショップがあり、読書や勉強をするスペースだけでなく娯楽スペースも充実していた。4日目の朝からはKMITLのバスで大学まで移動したが、毎朝、KMITLの学生がホテルまで迎えに来てくれた。

4日目の昼食は、グループごとに学内のカフェ



図 11. 賞状を授与され、思わず笑顔に

テリアや、学外のフードマーケットに食べに行った。おすすめの料理、辛いかどうかなど、私たちの疑問にすぐに答えてくれ、充実した昼食となった。この日の自由行動では、学内でこの日と翌日のみ行われるというフードイベントを見て回った。料理や衣料品の屋台が並び、賑わっていた。そこで、何人かの学生が昆虫を食べ、その食感に驚いていた。

夜は、ナイトマーケットで買い物をした。私たちが「香水が欲しい」と言うと、売っている店まで案内してくれ、店主に聞いて値段交渉までしてくれた。5日目の昼食休憩では、昼食後に **Tops Market** というスーパーに移動し、**KMITL** の学生のおすすめのお土産などを購入した。**PBL** の学校での準備が終了後、前日に引き続きフードイベントを訪れた。福笑いや輪投げなど、日本の遊びが無料でできる屋台があり、**PBL** に参加していない **KMITL** の学生とも交流することができた。

6日目の **PBL** の発表終了後、全員で記念撮影をして、昼食を食べた。その席で、午後の自由行動でどこに行くか話し合った。しかし、何人かの **KMITL** の学生は、午後の自由行動に同行することができず、3日間ともに過ごした友人との別れを惜しみ、涙を浮かべる学生もいた。

自由行動では、電車でバンコクまで移動した。この後、船からバンコクの景色を眺めつつ、ワット・アルンに到着した。私たちは精巧に作られた寺院の外壁に驚いた。ワット・ポーの涅槃仏も訪れ、夕食は牛丼を食べた。そこで **KMITL** の学生に「箸を使ってみて」と言うと、少し教えただけで米粒までつかめるようになった。ホテルに戻った後も、最後の夜ということで別れを惜しみ、一緒に写真を撮ったりしながら、

夜遅くまでロビーで語り合った。

【感想】

私は、この研修を通して、英語が通じなくても、伝えようと必死にしゃべれば、必ず言いたいことが伝わるということを学んだ。タイでは、聞き慣れた発音やイントネーションと違う英語を話され、何を言っているのかわからないことがあった。しかし、そういう時は、分からない部分を繰り返し言ってもらうことで、理解することができた。同じように、こちらの英語が伝わっていないと感じた時は、簡単な単語を使い、例を考えて話すことで、理解してもらえた。最終日には、スムーズに会話ができるようになった。

外国語は、相手の気持ちを読む必要がないと思っていたが、実際には相手の気持ちを考えて話す必要があると感じるようになった。タイでもシンガポールでも現地の学生がいなければ、ここまで楽しく、安全に過ごすことが出来なかっただろう。今後も彼らと交流を続けていきたい。

◇ 情報学群 1 年 塩谷 祐佳

3月24日に訪れた **NTU** は、東京ドーム4個分の広さがあり、驚いた。教室内に **NTU** の学生がすでに待機しており、快く迎えてくれた。彼らは“**Japanese Appreciation Club**”と呼ばれる日本愛好会の学生で、日本語で交流することができた。

最初は自己紹介から始まり、次に **NTU** の学生の日本語による挨拶と大学やシンガポールの紹介、その後、私たちがプレゼンテーションをした。

プレゼンテーションでは、**NTU** の学生がなんと日本語で発表した。途中、聴衆に問いかけるなどの工夫があり、私たちも、より聴衆を引き込めるような方法を考えたいと思った。

次にシンガポールの紹介では、シンガポール人がよく使う英語の「シングリッシュ」を学んだ。「早く、早く」を意味する“**chop chop**”は面白く、シンガポール滞在中に私たちもよく使った。

私たちは、日本や高知、**KUT** について発表し、その後、よさこい踊りを披露した。これには **NTU** の学生らが大喜びしていた。

【感想】

NTUで印象に残ったのは、蜂の巣の形をした「The Hive」という建物である。小さな教室がいくつもあり、私たちが訪れた際にも、何人もの学生や先生がディスカッションをしていた。KUTでもこのようなユニークな形状の教室があれば、より楽しいのではないかと感じた。

また、タイやシンガポールの学生と交流をする中で、日本の学生のやり方と全く違うやり方があることに気が付いた。特にタイの学生とPBLを取り組んだ際には、明らかな違いがあった。日本の学生は話し合いをした後にプレゼンテーションを作成し、また話し合いをする。これに対し、タイの学生は話し合いをしながらプレゼンテーションを作成するのだ。タイの学生のやり方は、時間をかけずに必要なことをまとめることができるので、私もこのやり方を参考にし、自分の考えを広めていきたいと思った。

今回の私の目標は、海外の学生と交流し、違う考え方を学ぶことや英語力を上げることであった。実際に海外の学生と交流したことで、プレゼンテーションの取り組み方や考え方の違いを知ることができた。自分の将来のためにも、多くの学生と交流していくべきだとあらためて気付かされた。

英語力に関しては、アジア圏では英語の発音の違いがあり、自分の英語が全く通じず、相手の英語が全く分からないことがあったが、ジェスチャーなどを通して伝えることができた。次回の国際交流活動では、英語の環境がどうであるかを事前に調べて臨むようにしたいと思った。

4. 刺激を受けて

◇ 情報学群 1年 森田 大智

3月25日の午前中に、A*STAR 研究所で3つの講義を受けた。最初の講義は、高知県シンガポール事務所の浅井孝則・副所長による「シンガポールから見た高知・日本」だ。高知県がシンガポールでどのような活動を行っているか、そこから見える高知・日本の魅力について説明を受けた。私たちは高知県がアジアで積極的に活動していることが新鮮で、積極的に質問をした。

2つ目のテーマは、A*STAR 研究所の井上雅文・室長による「感染恐怖症について」だ。感染恐怖症の研究とともに、全体としてKUT学生に挑戦することの大切さ、英語を勉強する



図 12. ハチの巣のような NTU の建物

ことの重要性についてレクチャーしてくださった。KUT 学生もタイとシンガポールを訪問したことで、井上室長の話す、海外からみた現代の日本についての考察に共感した。その後、井上室長の発案で、“table talk”と呼ばれる、質問を選び、2分間で考えをまとめ、それを英語でプレゼンするというゲームを行なった。私たちは積極的に参加し、拙いながらも全員が英語で意見を述べた。

3つ目は Julie 先生による、「ビジネスインキュベーターについて」だった。これはスタートアップの企業に対し、3カ月ほどのサポートを約束し、代わりに利益の数%を得るという仕組みだ。シンガポールでは学生が起業することが珍しくない。このため、大学が積極的に奨励しているとのことだった。私たちはそのことに驚き、少し焦りを感じた。

また、どういったプランで商品を生み出すかという説明を受けた。大きく分けて2つあるが、1つは、SNSのように、すでにある技術を用いて新しいビジネスモデルを生み出すやり方と、もう1つは新しい技術で利益をだすやり方である。スタートアップの企業は資金が少ないので、SNSを用いる場合が多いとのことだった。

だが、新しいビジネスモデルを用いて起業したとしても、成功率は約10分の1。例え成功しても、商品を成長させるための戦略を考える必要がある。よって、課題はまだあるとのことだった。このように、リスクを恐れず起業するという考え方は、大変刺激になった。

【感想】

最も思い出深いのは、タイの学生の英語の訛りだ。今まで関わってきた海外の人は英語が母国語の人が多かったため、タイでもそういった



図 13. 機能的な NTU のキャンパス

発音を予想していた。しかし、実際は訛りが強い英語だったので驚いた。恐らくタイ人も、私たち日本人の発音にてこずっていただろう。以前は発音やアクセントなどは、日本風の発音でも通じると考えて、重要視してこなかったが、研修を通じ、Paul 先生のように、誰にでも通じるきれいなアクセントで話すことが重要だとわかった。

夜、タイのマーケットに向かって歩いていた際、路上の溝で横になっている貧しい身なりの少年がいた。14 歳ぐらいの子供だった。日本であれば補導されてもおかしくないが、ただ寝ていたのか、ふざけていたのかはわからない。にぎやかなタイにも、貧富の差が存在するのだと感じた。

シンガポールでは、NTU の学生と仲良くなり、以前から興味があったキリスト教教会を訪問した。そこは日本に興味があるキリスト教徒や、日本人のための教会だった。みな人種の区別なく会話しており、多様性を受け入れるシンガポールの文化に感心した。日本もやがてはこうした多様性を受け入れる寛容な社会になるのだろうか。

◇ 経済・マネジメント学群 2 年 井上 智賀

バイオポリス訪問でシンガポールの経済状況を学んだ後、Business Incubator を見学した。Julie 先生からマーケティングや企業や商品開発についての過程を聞き、シンガポールは世界で最も起業しやすい国であることを実感した。シンガポールは、投資を受けやすく会社設立の登記が簡単にできるなど、起業にあたっての環境が整っていた。

Julie 先生は、実際に大手 CAD ソフトウェア

メーカーの「Autodesk」と、投資教育スタートアップの「Dr Wealth」を案内してくれた。企業訪問までの道は、近代的なデザインのビルが立ち並んでおり、ここがアジア経済の中心であることが感じられた。ある企業の入り口には、たくさんの植物や池があった。あえて異空間の場を工夫して作ったのだと言う。

「Autodesk」では、デザインテクノロジーを学んだ。KUT 学生は最先端の技術を間近で感じ、製品の構造や可能性についての説明を興味深く聞いた。同社では、3D 技術を使ったデザイン・エンジニアリングを展開しており、私たちの身の回りで使うものに活用されていた。

次の「Dr Wealth」は、金融教育を顧客に提供し、実用的な投資方法を教えていた。ここでは、個人投資家にとって不安定な土壌をサポートする事業であること、投資アプローチの過程や体系的な投資方法の促進について新しい知識を得ることができた。

私たちは、所属する学群こそ違うが、企業訪問で学んだことは、本学の講義にも結び付けられるように感じた。

【感想】

今回の研修を通して、国境を越えた異文化の壮大な世界というものを感じることができた。現地学生との交流を通して、日本とは違った衣食住・考え方を知るうちに研修に来た意味というものに気付いた。特に TNI、KMITL の学生と過ごした時間は、とても濃いものであった。彼らは、タイで良い思い出をつくってほしいという一心で、毎日様々な観光地に案内してくれた。

そのような中で、印象に残っているのは、情緒漂うタイの歴史と、タイの学生たちの創造力である。バンコクのワット・アルンやワット・ポーといった歴史的な寺院を見に行き、参拝したことで、歴史の奥ゆかしさを感じることができた。その大きさに私たちは圧倒されるばかりだった。

タイの学生の創造力は、KMITL での PBL での作業中に感じた。彼らは勉強熱心で作業が早く、問題解決における解決策の内容も、日本人とは違った柔軟な幅広い考え方をしていて、異なる観点からの見解も聞いてくれた。そこでも文化の違いを感じた。

このような文化の違いに触れていく度に、私自身のあり方について考えるようになった。タ

イの学生に倣って積極的にコミュニケーションをとり、自分の考えを伝えることができるようになった。積極性、自己表現など、研修前ではなかなかできなかったことが、やがて研修を通してできるようになった。これが、私自身にとって大きな収穫だったと感じている。

タイ・シンガポールでは、それぞれの魅力を五感で感じた。その感じたものをこれからの学生生活に生かし、グローバルな人材に一步近づくことができるよう、勉学にも国際活動にも励んでいきたいと思った。

このような素晴らしい機会を作って下さった引率の先生方をはじめ、国際交流課のみなさん、研修に携わって下さった方々に心から感謝している。

5. 多文化の中で

◇ 経済・マネジメント学群1年 三浦 紀乃

シンガポール初日は、ホテルにチェックインした後、観光名所を回り、自由時間を楽しんだ。スクールが過ぎるのを待ったため19時頃にホテルを出発したが、日本と違いまだ外は明るかった。ガイドブックやマップを片手にガーデンズ・バイ・ザ・ベイやマリーナベイ・サンズなど、観光名所に向かった。

夜のシンガポールは暑さも和らぎ、日中に比べ行動しやすかった。慣れない地下鉄やバスの乗り換えに戸惑うこともあったが、英語で尋ねながら目的地に向かう時間も非日常的で刺激的だった。夜も人で賑うマリーナエリアを歩きながら、ビルの高さやライトアップされた多くの施設から、シンガポールの経済の発展や活気を感じた。

ナイトショーやライトアップなどシンガポールの夜の景色を堪能しながらホーカーセンターで夕食を取った。ホーカーセンターは中華系やマレー系、インド系など様々な国の料理が集まっていた。英語や中国語などで書かれたメニューや看板、様々な言語が飛び交う会話から多民族国家であるシンガポールらしさを感じながら食事を楽しんだ。

2日目の午後の自由行動は、午前中に訪れたNTUの学生が案内してくれた。最後の大学訪問だったこともあり、すぐに打ち解け、冗談を言い合ったりして移動中も会話は盛り上がった。海を見るため訪れたセントーサ島は、とても半日では足りないと感じるほど多くのレジャース

ポーツや観光スポットがあり、充実した時間を過ごすことが出来た。NTUの学生との別れを惜しみながらも、ホテルに戻ってきたKUT学生の表情は、満足そうだった。

あっという間に最終日を迎えた。20時にホテルを出発し空港に向かった。移動中KUT学生は思い出を振り返っていた。シンガポール・チャンギ空港を出発し8時間半のフライトを経て、羽田空港から1時間半ほどで高知空港に9時頃着いた。皆の表情は高知空港を出発する前の期待と不安が入り混じったものではなく、これからの自分の可能性への期待と自信で満ち溢れていた。

【感想】

私は、今回が2度目の海外研修だった。昨年の夏のEnglish Boot Camp in Vancouverで初めて海外に行き、そこで異文化体験の楽しさを知り、語学力とコミュニケーション力の必要性を実感した。だからこそ、私にとって現地の学生と関わる時間は、とても有意義で刺激的だった。

研修前は現地の学生と思うようにコミュニケーションが取れるのか不安だったが、心を通わすことができ、現地の学生と仲良くなれたことは一番の思い出になった。タイの学生もシンガポールの学生も常に私たちのことを気にかけてくれた。

彼らが当たり前のようにしてくれる気遣いの1つ1つが嬉しく、その優しい人柄に惹かれた。また日本のことについて詳しい学生が多いことにも驚き、自分の知識の無さを悔いた。相手の文化を知り、受け入れることが当たり前のようにできる彼らに感心した。

KMITLで行ったPBLでは、彼らの能力の高さや価値観の違いに驚いた。特にグループが一緒だった経済を学んでいる学生には、刺激を受けた。私のグループの解決策はシステムを使ったものであり、私はなかなか話し合いで意見を言うことが出来なかった。心のどこかで私の勉強している分野でないから分からなくても仕方ないと思ってしまっていた。

しかし、彼はシステムについての提案だけでなく、パワーポイントで使う動画編集まで行ってくれた。学部という枠を超えた彼の教養の高さに驚くと同時に刺激を受けた。KUTは全科目選択制であり、多くの分野を学べる。このことを活用し、これからの大学生活では、幅広



図 14. 井上室長の講義を真剣に受講

い知識と能力を身に付けようと思うきっかけになった。

シンガポールでは、経済の発展と若者の活気を肌で感じる事が出来た。NTUの学生と話していると、学ぶ姿勢の積極性に差を感じた。大学でしている勉強や就職の話をしなが、世界を見据える視点に感銘を受けた。

広い視野を持つことでもっと可能性が広がること、今持っている能力や技術をさらに向上させる事が出来るということに気付いた。また語学力やコミュニケーション力を高め、新たなことに積極的に挑戦していきたいと思った。

◇ 経済・マネジメント学群1年 濱田 光

シンガポールでの自由時間は、マリーナベイ・サンズとマーライオンが見える絶景スポットを訪れた。そこに設置されているマーライオンは定期清掃中のため、見る事ができなかったが、マリーナベイ・サンズの迫力と、近代的な建物との景色だけで大満足だった。

シンガポールには7体のマーライオンがあり、セントーサ島には、一番大きな像が設置されていた。入場料を支払って中に入り、マーライオンの頭部や口から外の景色を撮影できた。撮影スポット毎に係員がいて、シャッターを切ってくれた。1周するとお土産店があり、その店員に写真の購入の有無を聞かれた。断るとそっぽを向く態度に、日本人との対応の違いを感じた。日本人はお客様を大切に接客するが、外国は異なるのだと感じた瞬間であった。

セントーサ島には、魅力的なUSS（ユニバーサル・スタジオ・シンガポール）があった。入場はしなかったが、日本と同様の地球儀のシンボルであるUSSと書かれた看板の前で記念撮

影した。

シンガポールフライヤーは、アジア最大の観覧車で、地上から最大で高度165mある。観覧車中、あと少しでてっぺんというタイミングでスコールが降った。しかし、これも旅の思い出である。雨で曇った窓ガラスから見える街並みがきれいだった。

ガーデンズ・バイザベイは、まさにシンガポールの景気の良さや明晰な頭脳が集まる場所のシンボルであると感じた。外観は光り輝く巨大キノコのような建物が何棟もあり、それは遠目にもわかる。中は、神秘的な空間で、外観の異質な感じと似ていた。

チャイナタウンを訪れた学生もいた。シンガポールは多国籍国家であるため、こうした中国人が集まったエリアが存在する。チャイナタウンには小さなデパートやショップハウスが並んでいた。他にもリトル・インディアというインド人が暮らすエリアがあり、様々な文化に触れる事ができた。

【感想】

私は、KMITLの学生と過ごした自由時間が、一番印象深く残っている。訪れたナイトマーケットでは、彼らが値切る言い回しをタイ語で教えてくれた。それを実践し、値段交渉を成功させる事ができた。私は、難しい英語を話すことも聞き取ることもできないが、KMITLの学生が、英語だけでなく、ジェスチャーや近くにある物などを指差しながら会話をしてくれた。この時に会話の仕方は様々あると気付いた。

また、日本のコントを英語でKMITL学生の前で披露すると、皆が笑顔になってくれていた。日本のコントは世界でも通じるとわかり、研修が終わった今でも、不思議な感覚にとらわれている。

私は今まで、友達とのコミュニケーションで困ることはなかったが、研修中は、現地の学生に英語で上手く伝えられず、悔しい思いをした場面もあった。しかし、その経験のおかげで英語学習に力を入れたいと感じるようになった。さらに世界に通用する人材になるには、自分自身をもっとレベルアップさせたいと思った。

◇ システム工学群2年 三輪田 廉

研修9日目、私たちはバイオポリスを訪れた。バイオポリスはシンガポールのバイオメディカ

ル分野の研究開発拠点である。私たちはここで、3人の講演を聴いた。まず、高知県シンガポール事務所の浅井孝行・副所長は、「シンガポールから見た高知と日本、拡大するアジア圏」と題し、高知県の商品や文化の海外発信について語った。私たちは、「情報が簡単に手に入る社会で、現地に赴く意義は何でしょうか」などと、意欲的に質問した。

次のA*STAR研究所の井上雅文・分子診断室長の講演では、感染症研究の最前線の様子や、「診断」と「治療」は別であるということを知った。その後、「自分の理解が及ばない問題に対してどう対処しますか」などと私たちに問いかけた。

講演後、井上室長は、私たちの英語による表現力を鍛えるため、英語の質問を用意し、皆の前で、即興で英語で意見を述べるよう促した。私たちは積極的に志願し、つたないながらも一生懸命自らの意見を述べた。

続く起業家のJulie氏の講演では、新しいビジネスモデルを持っている新興企業と、その会社を成長させ、事業を大きくするための仕組みについての紹介があった。自社の製品をゼロから作る難しさや、同じスタートアップのランク付け、またどのように投資家を見つけるかなどについて知ることができた。イノベーションとは、単に技術開発だけにとどまらず、ビジネスモデルや新たな市場の開拓など様々な種類があることを学んだ。

【感想】

KMITLでの初日、私はタイの学生と仲良くなれるのか不安だった。しかし、PBLや自由時間で多くの事を話し合うと、あっという間に仲良くなれた。まず、初めに受けたカルチャーショックは、タイの生物への考えである。昼食の時、ある一匹の蚊が、JugJigという女子学生の腕に止まった。私は、彼女がそっと蚊を捕まえて逃がしてやった事に、タイの人が蚊一匹の命でさえ大切に考えていることに驚いた。

2日目の夜は、現地の学生とナイトマーケットに出かけた。この時、歌を歌ってお金を集める2人組のストリートチルドレンを見かけた。私はタイにいる間、何度かこのような光景を目にしていた。私は彼女らを見ながら、日銭を稼ぎながら学校に通い、勉強する時間があるのだろうかと考えていた。教育格差はそのまま所得



図 15. Autodesk で革新的なアイデアを学ぶ

格差につながるといわれる。私は、数学教員免許を取得しているのも、もしこのような問題に取り組むプロジェクトがあれば、いつか参加してみたいと思った。

3日目以降もタイの学生はいろいろな場所に案内してくれた。彼らは、いつも穏やかな表情を浮かべながら私の頼みに一切嫌な顔をしなかった。お互いのコミュニケーションがうまくかみ合わないときもたまにあったが、状況やジェスチャーなどで、難しいことも最後には理解することができた。

このようなやりとりで、相手のことを察する力が鍛えられたように思う。また自分が理解できないことは相手に尋ねた。すると、そこにはしっかりと理由があるものが案外多かったし、理由を突き詰めていくことで、その国の文化的、歴史的背景が見えてくると気付いた。

タイでの活動が終わり、シンガポールに移った初日、私たちは南洋理工大学（NTU）を訪問した。その大学の日本愛好会の学生たちと話をした。彼らは皆優秀で、苦勞しながら頑張っていた。私も彼らを見習おうと思った。私はこの研修を通して他国の友達ができ、世界で起きている遠い出来事が、身近に感じるようになった。今まで以上に自分の専門分野を学び、将来国際貢献できるようになりたいと思った。

◇ 情報学群 1年 赤嶺 駿

南洋理工大学（NTU）では、私たちのプレゼンが終わった後、約1時間、NTUの学生にキャンパスを案内してもらった。皆、日本ではなかなか見られないキャンパスビルのデザインに驚いていた。10人のシンガポール人は、簡単な日本語なら話せた。「日本愛好会」と、漢字で書か

れたサークルのシャツを着ている学生もいた。

「日本愛好会」は、23年前に発足し、毎年NTUに来た日本人と交流したり、日本文化祭などを行ったりしている。ある中華系の女子大生は、大学に入ってから日本語を勉強し始め、中国語、英語を流暢に話すことができた。ある男子学生は、NTUの学費が高いため、週4日デリバリーのアルバイトをしながら、バイオテクノロジーの研究に励んでいた。

NTUの学生に「将来の夢は何?」と質問すると、「Googleで働きたい」や、「火星に行くこと」と答えるなど、高い目標を掲げていることが分かった。

キャンパスのデザインで最も印象的なのが、The Hiveというハチの巣のような形の建物である。丸みに沿って1フロアごとに約10個の教室があった。ここは、少人数授業に使われたり、授業の予習や放課後のクラブ活動などにも使われていた。エレベーターで上の階に行くと、眺めがきれいであった。食堂ではファストフードの店が並んでおり、皆で昼食をとった。キャンパスの広々とした空間には巨大なディスプレイがあった。サッカーの試合などを見ることができるといふ。私たちはコーヒーやタピオカ入りのドリンクを飲んで交流を深めた。帰りは最寄りのBoon Lay駅まで無料のシャトルバスがでており、とても便利だった。

【感想】

私が、この海外研修に申し込んだ理由は、初めて海外を経験することで、自分の視野を広げることだった。しかし、研修を終えた今は、様々な目的意識を持って参加したKUTのメンバーと、海外の優秀な学生と現地で関わったということが、貴重な体験だったと感じている。

研修で非常に驚いたのが、タイの学生の優しさと真面目さである。お薦めの店へ連れて案内してくれた上に、「お金を払うよ」と常に言ってくれた。できる限りこちらが払おうと努力はしたが、いつの間にかタイの学生が会計を済ませていた。支払うと言ったが、お金は受け取ってもらえなかった。

さらに、家から遠く、夜遅いにもかかわらず、私たちのホテルまで送ってきてくれた。こうした見返りを求めない優しさに、驚きを隠せなかった。タイでは、野良犬が多かったり、ヘルメットなしで3人乗りのバイクが走って

たり、バスが音楽をガンガン鳴らしながらドアを開けばなしで早いスピードで走っていたりと、日本ではありえない光景に出会い、ただ歩いているだけでも楽しかった。

シンガポールでは、近未来的な建物に囲まれて、多様な人種の人たちが、ともに研究やビジネスをしているのを目の当たりにして刺激を受けた。NTUでは、同じ学年でも年齢が2つほど上の人が多かったが、シンガポールには2年間の兵役があるためだということを知って驚いた。

ひょっとしたら実現するかもしれないので、火星に行くことが夢だと語る学生と、写真を撮っておけばよかったと後悔した。また、アジアでトップの大学の学生でも、生活に苦しい人はアルバイトと学業を両立しなければならないことを知って、自分も負けずに頑張ろうと思った。

さらに私は、KUTのキャンパスのデザインが好きだが、NTUのキャンパスのデザインのほうが好きだと思った。NTUの女子学生に、NTUに入学するのはどれくらい難しいかという質問をすると、「学部によるが、かなり難しい。私は推薦で入ったから周りの人よりは苦労しなかった」という答えが返ってきた。シンガポールは、小学校のテストで人生が大きく左右されるため、日本より学力重視の国だと感じた。

アジアでトップレベルの大学生と話せただけで興奮がおさまらなかったが、私も大きな目標をもって頑張りたいと思った。この研修で、半年前のサマースクールでは聞き取れなかった英語が、ある程度聞き取れるようになった。この調子で次のTOEICは200点アップできるよう頑張りたい。

◇ 情報学群 4年 野田 正太郎

ビジネスインキュベーターは、「Autodesk」と「Dr.Wealth」という企業を訪ねた。ビジネスインキュベーターとは、創業間もない企業に対し、不足するリソース（低賃料スペースやソフト支援サービスなど）を提供する施設である。そこから、革新的なアイデアが生み出される。

「Autodesk」は、3D技術を使ったデザイン・設計、エンジニアリング、エンターテインメント向けソフトウェアのリーディング企業である。主にAutoCADというCADソフトウェアを扱っていた。

そこでは、親企業から設備・費用が提供され、

エンジニアが自由な創作活動を行っていた。シンガポールでは職場環境に不満がある場合、すぐに社員が転職してしまうことから、企業側は優勝な社員を確保するため、様々な工夫を凝らしていた。「Autodesk」は、オフィスを「楽しいエンターテインメント空間」とすることで、社員のモチベーションを保っているように思われた。

創作用の部屋には、3DプリンタやRaspberry Piといったエンジニアの発想を具体化するための設備・物品が揃っていた。ここではエンジニアの幸福度が高く、発想力が刺激されていることが伺えた。日本の企業のように、エンジニアがストレスを抱えながら働いているのとは大違いだった。

次に訪問した「Dr.Wealth」は、投資に関する教育とアドバイザー業務を行っていた。ここは起業したばかりのスタートアップ企業で、具体的には、Webサイトに記事を掲載。講演会の開催、投資に関する勉強会を主催していた。起業する際、直面する問題の1つに「どのように収入を得るか」がある。起業間もない「Dr.Wealth」が、投資に関するアドバイザー業務だけでは安定した利益を得ることは難しい。そこで投資に関する知識を普及させる教育分野にも力を入れていた。

この2つの企業は、成り立ちや経営の仕方が大きく違った。起業してから経営が安定するまでの間にどのような課題と手法があるのかを学ぶ良い機会であった。

【感想】

私は研修に参加するにあたり、「海外の人と仕事をする上で、文化・国民性の橋渡しをする人が必要なのではないか」という仮説立てた。これを実証し、自身の進路に対する判断材料の一つにしたい、と考えていた。

KMITLで行ったPBLのように、タイ人とグループワークをすることは初めてであり、これは「日本との文化・考え方の違いがどのような形で会議に影響を与えるのか」を知る良い機会となった。

タイ人学生は、会議における役割分担や指示が、非常に手際良かった。私たち日本人学生は、

最初にPBLの準備全体の仕事を均等に分担しようと提案した。多くの日本人学生が、この



図 16. 起業間もない Dr. Wealth のオフィス

ような手法を取ると思われた。

しかし、結果として私たちの意見は採用されなかった。話し合いの結果、タイ人学生はパワーポイントと動画作成の全てを行うことになった。その理由は「自分の得意な部分は分担せず、全てその人が行った方が効率が良い」ということであった。仕事量を基準に役割分担しないという手法は、日本人のみのグループワークではあまり見られない形だと感じた。タイ人学生は、短時間でプレゼンテーションの内容を練り上げる能力に長けていることも分かった。

また、会議で意見を出し合う際には、日本との違いを感じた。日本人だけのグループワークでは、「とりあえず意見を出し合う」といった形で会議が進行する。グループの何人かがそれぞれ意見を出し合い。その中から全員で最適な意見を決めるという手法である。これに対してタイ人学生との会議では、自身の意見を主張し、相手を納得させることに重点を置いていた。

さらに興味深いのは、スピーディーかつ能動的な会議をしているにもかかわらず、タイ人は会議に飽きたり、疲れたりすると、活動をすぐにやめてしまうことだ。私たちの2日目の会議では、終了時間の2時間前には会議を終えていた。KMITLの学生は「明日になればどうにかなるだろう」ということであった。良くも悪くもオンとオフがはっきりしていると感じた。

シンガポールでは「Autodesk」の訪問が印象深かった。「Autodesk」では、いかに社員に楽しくオフィスにいてもらうかということに重点を置いていた。日本の企業のように、社員が弱い立場にないことが印象的だった。

「Autodesk」では、社員が創作した作品を展覧会やコンテストに出展することができるとい

う。なるほどエンジニアは、自身の技術力を多くの人に評価してもらうことで満足感を得る。これが得られなければ、エンジニアは働く上で大きなストレスを抱えてしまう。「Autodesk」の制度は、エンジニアの幸福度と発想力を高めることに非常に効果的であると感じた。

世界ランキング 13 位の南洋理工大学の訪問も有意義だった。同大の図書館には、学生が息抜きするための設備が多く設置されていた。カラオケ、ゲーム機、ビリヤードなどは、日本の大学ではあまり見られない設備である。シンガポールでは、学力競争が激しいため、学生のストレスを緩和するために娯楽設備を設置しているという。学生は驚くほど勉強熱心で、レベルが非常に高いと感じた。

研修を通して、タイとシンガポールの文化を体験的に理解することができた。今後の学生生活においても研修の成果を発揮していきたい。

6. 同行者から

The Thai-Singapore study tour continues to be a popular short-term study abroad experience for KUT students. While this study tour experience is too brief to enable students to make significant gains in English ability, it successfully achieves two main objectives- first it motivated students to continue their English studies after returning to Japan and perhaps inspire them to study abroad again in the future.

Secondly, this experience provides students the opportunity to reflect on their current English levels so that they can better determine how to improve their English language skills in the future.

Each year there has been a number of important improvements to the program. This year was the first time that a language teacher from KUT joined to assist with English language learning activities. The key component of this program is the project-based learning or PBL module where KUT students work with Thai students to research and present on current topics related to Thailand and Japan. Although the time frame for the PBL project is brief, students are engaged in using English over a 3-day period.

On the third day students give group presentation as an end-product, but the key to the success of PBL is not the quality of the end product but the impor-

tance of the process, for example how they negotiate topics, state opinions and share ideas in an English-only environment. In the future, it may be advantageous to have students choose topics and prepare data before the study tour to improve the quality of the end product.

In addition to the PBL component, KUT students give presentations on Japan and Japanese culture during this study tour. These presentations could be enriched by employing a structure similar to PBL, where smaller groups of students give concurrent presentations. An informal small-group presentation style would allow for greater opportunities to ask and answer questions in English.

In Singapore, a similar approach could be taken. When visiting universities in Singapore, students could be arranged into smaller groups, to provide far greater opportunities for students to speak English as opposed to giving more formal presentations to the entire cohort. Likewise, when visiting the “start-up” companies in Singapore, a similar small-group approach may be more beneficial. Rather than a single start-up employee giving a formal presentation to the entire group of Japanese students, the program could be re-structured to allow several employees to lead smaller “informal group information meetings” that provide KUT students more chances to interact with the company workers.

In conclusion, the PBL component was the least structured activity and lacked formality that is often a vital part of Asian culture, but on the other hand, the informal and spontaneous qualities of PBL were the most constructive elements in creating a positive language learning experience for KUT students. (Paul Daniels)

国際交流課員として、昨年に続き本研修に参加した。本研修は、本学の国際交流プログラムの中では初心者向けのプログラムに位置付け、海外大学の学生との交流や異文化に触れることで、学生の国際的見識を深めること、また今後の英語学習に対するモチベーションをあげることを目的としている。

研修中、英語を使って海外大学の学生とグループでプロジェクトを遂行したことで、参加者には英語での発話に対する自信が芽生えたのではないかと思う。完璧な英語を話すことよ

りも、国際人としてのコミュニケーション方法や姿勢を身につけることも重要であるということを感じたのではないだろうか。

また、海外学生との交流や、複数の大学・企業を訪問したことは、将来こういった英語力も高くバイタリティもある海外の若者と共に働き、また競争もしていかなければならないという危機感やグローバル社会における日本社会・日本人の現状について考える機会になったようである。今回の研修が参加者にとって、今後の英語学習の必要性はもちろん、いつもいる環境の一步外から自分自身や日本を見つめ、国際人としての気づきときっかけも与えるものになったことは価値のあることだと感じる。

最後に、研修はタイの協定校各担当者、シンガポール科学技術庁の研究者、起業家の皆様をはじめ、多くの方のご協力をいただき本年度も無事終えることができた。あらためて関係各位に深く感謝したい。(森尾 祥子)

本研修に職員という立場で参加した。日頃学生と接している中で感じるのは、やはり本学は理工学系の学生が多いため、英語や国際交流に対しての苦手意識があり、またその必要性に気付いていないと感じることが多い。しかし、これから訪れるであろう社会(予測不能で今までに遭遇しなかった問題に衝突する、変動が大きい社会)において、広く国際的な視野や知見は、必ず必要であり、学生時代の吸収力が高い年代で経験することは、大変有意義なことである。そのため、近年、教育センターと国際交流センターがジョン万次郎プログラムや留学支援制度を充実させている。

本研修は比較的初級者向けにプログラムが構成されており、参加者も低学年の学生が多く、初めて海外渡航するという学生も少なくなかったが、多くの成長が見られた。特に訪問先の現地学生と共同で行ったPBLではタイの学生の語学力、発想力や知識などの高さを感じとり、それに負けないよう積極的に取り組む姿勢を見るだけで、本研修の価値を感じさせられた。また、多くのコミュニケーションを通して、語学力以上に英語で発信する勇気や行動力を養うことができたのではないだろうか。

最後に、本研修で多くの刺激を受けた学生達には、専門分野の学修だけでなく、今後の幅広い学生生活に活かしてもらいたいと願う。も

ちろん、訪問先でできた友人とのコミュニケーションのためにも、今後の英語学修を継続してくれることも期待したい。そして私自身はこの価値あるプログラムを、より多くの学生やくすぶっている学生にきっかけを与えられるよう、職員として周知や後押しをしていかなければならないと痛感した。本研修にご協力いただいた関係各署の方々に、改めて感謝の意を述べたい。(山本 聖志朗)

7. 終わりに

日本の外にこんなにも面白い世界がある、ということに参加した学生たちが気付くと、新たな地平が見えて考え方が変わる。さらに英語が通じ、外国の人たちとのコミュニケーションがスムーズにできるようになると、世界が広がる。今やボーダーレスの時代となり、異文化の中で多国籍の人たちと働くことは、当たり前のようにになった。

グローバル人材(Global Human Resources)とは、世界のどこでも活躍できる人材のことである。それを目指す最初の一步が、海外研修であっていい。次は留学や海外インターンシップのチャンスもある。要は、専門分野だけでなく、日本の歴史や文化、政治、社会のことをよく知り、自分たちの意見をどこに行ってもきちんと言えることである。

次世代を担う学生たちに求められるのは、語学力、コミュニケーション能力、主体性、積極性、チャレンジ精神、協調性、柔軟性、責任感、使命感、異文化に対する理解、他者への共感能力、人権意識であろう。それを持つことが、地球規模の視点を持つことにつながるはずだ。

The Report of the KUT Globalization Program from the Thailand & Singapore Study Tour

Shinichiro Sakikawa*

(Received: May 7th, 2019)

International Relations Center, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

* E-mail: sakikawa.shinichiro@kochi-tech.ac.jp

Abstract: The annual Thailand & Singapore study tour of KUT in the 2018 fiscal year was conducted from March 17th to the 26th. Twenty undergraduate students from the School of Systems Engineering, the School of Information, the School of Environmental Science and Engineering, and the School of Economics and Management participated. For the purpose of learning globalization, ethnic diversity and multicultural perspectives, we visited Thai-Nichi Institute of Technology (TNI), King Mongkut ' s University of Technology Ladkrabang (KMITL), Agency for Science, Technology and Research (A*STAR), and Nanyang Technological University(NTU). The director of International Relations Center, Professor Shinichiro Sakikawa, English Professor, Paul Daniels, and two administrative staff, Ms. Yoko Morio and Mr. Seishiro Yamamoto accompanied the students. During the study tour, KUT students interacted with foreign students and discovered the academic and research levels at TNI, KMITL and NTU. Thai and Japanese students spoke in English, studied different cultures, and deepened their friendships. It is believed that this was a precious opportunity for students to realize globalization.